

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 森平 崇文

19世紀なかばのアヘン戦争以後、中国最大の国際貿易都市として急激に発展した上海には膨大な人口が流入し、西洋諸国の影響と相俟って独自の都市文化が生み出された。本論文は、1920年代の上海に誕生した独脚戯（日本の漫才に相当）と、1940年代の上海に誕生した滑稽戯（日本の新喜劇に相当）に焦点を絞り、大衆芸能というユニークな視角から上海文化の展開を克明に分析した作品である。

本論文は、序章と結論部を除けば、独脚戯の前史をなす1910年代の趣劇を分析する第1章「趣劇の行方」から、中華人民共和国成立直後の1950年代における滑稽戯の在り方を分析する第6章「オールド上海を刻印する」まで、合計6つの章から構成される。各章は、おおむね時間の流れに沿いながら、それぞれの時期において重要と思われる問題を問題史的に取り上げ、全体として20世紀前半の上海における大衆芸能の歴史を通観している。上海の映画史やジャズ史に関する研究は日本でも少なくないが、上海の大衆芸能に関する通史的研究は、本論文をもって嚆矢とする。

本論文の最大の長所は、大量の一次資料を用いて分析している点にある。もともと大衆芸能関係の資料は散逸する傾向が強く、研究に必要な資料がまとまって存在するわけではない。著者は2度にわたる上海留学のほか、その後も足繁く現地に通って一次資料の発掘に努め、主要な新聞である『申報』のほか、当時大量に発行されていたタブロイド新聞等も駆使して、20世紀前半の上海芸能史における様々な事実を確定した。そして、確実な資料的基礎の上に立って、多くの芸人や劇団を分析している。その際、例えばラジオの出現による大衆演芸の変化に注目するなど、単なる芸能史的分析にとどまらない、社会史的な関心に基づく研究を展開している点が、本論文の今ひとつの大きな長所である。

とはいえ、本論文に問題点がないわけではない。審査の過程で指摘された本論文の問題点は、以下の2点である。第1に、本論文の6つの章はもともと独立の論文として発表されたもので、それを再編成して学位請求論文としたものであるが、再編成の程度が必ずしも十分でなく、単一のモノグラフというよりは、論文集に近い印象を読者に与える。第2に、社会史的研究を志しているにもかかわらず、分析対象が芸人と芝居に偏し、社会史的演芸研究に欠かせないはずの観客に関する分析が欠落している。

これらの問題点を抱えているとはいえ、自ら発掘した膨大な一次資料を踏まえつつ、上海の大衆演芸を社会史的観点で捉え、その歴史を長期的パースペクティブで描いた本論文の成果は独創的なものである。著者には自立して研究を行う能力がすでに十分であると認められ、今後は本論文をさらに改訂して優れた作品に仕上げていくことを期待できる。

よって、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。